

笑顔の魔法

神奈川県 港小学校 6年 久保田 ゆず希

私は、母が恥ずかしい。初めて会った人にも、まるでずっと友達だったように接するからだ。あまりにも親しげに話すので、「知り合い？」と聞くと、「ううん。知らない人だよ」と平然と言うので、あきれてしまう。

母と出かけると、エレベーターの中、スーパーのレジ、バスの停留所など、いろいろなところでそういうことがある。私はとなりで小さくなって、母の腕をつついたりするが、まったくおかまいなしで、「あら、なあに？」と悪びれる様子もない。「では、ごめんください。」と離れるときは、心底ホッとする。

「もう！恥ずかしいからやめてよ！ママはだれにでもおせっかいすぎるよ！」と怒っても、「なんで？」

と、きょとんとしている。高学年になってからは、ますます母と出かけることがゆううつになってきた。

そんな今年の夏休み。家族で温泉旅行に行くことになった。お盆期間中の電車は、観光や帰省の人たちで混雑していた。同じボックス席に乗り合わせたおばあさんが、落としたネコ柄のハンカチをきっかけに、

「あらあ！かわいいですねえ。ネコ、お好きなんですか？うちにも3匹いるんですよ～」と、いつもの調子で始まってしまった。(あ～あ)と私は車窓の海を見つめて、他人のふりをしていた。

おばあさんもネコを飼っているようで、二人はネコの話で盛り上がっていた。しばらく楽しげに話していたが、突然おばあさんが両手で顔を覆ってうつむいてしまった。具合でも悪くなったのかと心配して、

「どうかされましたか？」

と、母がのぞきこむと、おばあさんは困ったように笑いながら、

「ごめんなさいねえ。」

と、濡れている目をぬぐった。おばあさんは泣いていたのだ。

とまどう私たちにおばあさんは、温泉の近くにある病院にずっと主人が入院していること。毎日の病院通いで、なぜだか今日は行きたくない気持ちで足が重かったことを語りだした。そんな暗い気持ちで電車に乗っているときに、母が話しかけてきたという。

「あなたと楽しくお話してね。ああ、やっぱり今日は来てよかったと思ったら、なぜだか急に涙が出ちゃったのよ。年を取ると抑えがきかなくなってダメね。普段は話し相手がネコしかいないもんだから、本当に楽しかったのよ。ありがとう。」

おばあさんはそう言って涙をぬぐうと、私に向かって、

「親切でやさしいお母さんを持って幸せね。」

と、やさしくほほえんだ。私は小さい声で、

「はい。」

と答えた。とても照れくさかったが、うれしかった。

次の駅で降りていくおばあさんと握手をして別れた。おばあさんはずっと頭を下げていた。私も見えなくなるまで手を振り続けた。なんだか心がほっこりして、光る海を見つめながら、私も母のように笑顔で人を幸せにできる人になりたいと思っていた。